

[No. 15 雪は降る…]

カリカリ、カリカリ、カリ…。二重窓の外から、かすかに聞こえる音。
15分ごとに時を知らせる、近くの教会の鐘が2度鳴った。薄目を開け
時計に目をやると、朝の4時半。外はまだ真っ暗だ。
ああ、雪が降り出したのだな、と思いながらまた眠りについた。

ドイツでの住居は、寝室が中庭向きだったので、カリカリ音はあまり
聞こえなかったが、ウィーンの5階の部屋の寝室は、小さな通りに面して
窓がある。建物を出ると歩道だが、どんなに雪のつもった日でも、普通に
ちゃんと歩けるように、必ず掃除がされている。というのも、雪が降ると、
毎朝4時半から30分おきに雪の様子を見るのは、建物の管理人の仕事の
一つで、「カリカリ音」は、歩道を雪掻きする雪用スコップの音。1976年に
ドイツでの生活が始まり、そしてウィーンに移っても、私にとって“カリカリ”
は「冬の風物音」のひとつと言える。

そんなに朝早くから、30分おきに雪掻き?! 日本では驚く人が多い
だろう。でもそれは管理人の報酬に含まれている。私の家の前だけでは
ない。どこの建物でも、人が歩くところはきれいに雪掻きがされている。
(だから、1976年に初めてドイツに行ってから、雪の多い国なのに私は
滑って転んだことはない! もちろんウィーンでも。) 一戸建ての場合は、
その家の“誰か”がやる。高齢者しか住んでいないところは、「冬の雪の日」
のために、必ず“誰か”を頼んでおく。

ただ、これは残念ながら「きれい好き」とか、皆がちゃんと歩けるようにと
いう心遣いのせいではない。法律によって決まっているからだ。そして
誰かが雪掻きのされていない歩道で滑って転んで怪我をすると、その
場所の「責任者」には保険やらナンやら、支払いが生じるらしい。
理由を思うと、何だか味気ない「きれいに雪掻きされた道」だが、それでも
不自由なく歩けるのはありがたい。それに、除雪車もしょっちゅう町中を
動いている。

だから、高速道路も普通の道も、ほとんどいつもきれいに除雪されていて、
余程のことがない限り、車の走行に支障が出ることはない。除雪が間に
合わなかったり、少し残った雪で歩きづらい箇所には、塩や砂の入った
小さな砂利がまかれ、滑り止めになっている。この「砂利」は箱に入れられ、
道路脇や市電の中に置かれて、結構使われている。

ただ最近では、街路樹や靴への「塩害」も問題になってきていて、その

解決法が議論されているとも聞く。

ある冬、東京から札幌に飛んだ際のショックは忘れられない。着陸時に窓から見えた滑走路が真っ白だったからだ。「エ、エ、あそこに降りるの?!」とドキドキするばかり。

ヨーロッパの生活の中で、ベルリンやフランクフルト、ウィーン、モスクワなど、雪の多い都市の空港では、飛行機の離着陸の合間を縫って、多くの除雪車が所狭しと動き回っている。余程の吹雪で羽に積もった雪の溶かしが間に合わずに、出発が遅れることはあっても、積もった雪のせいで不安感を覚えることはなかった。滑走路そのものは、ほとんどの場合、夏でも冬でも同じように整備されていた。日本では、「飛行場の除雪は、飛行機の飛ばない朝と夜にやる」のですので…それだけ? 本当かしら!?

東京では、ほんの少ない量の雪で街中が大騒ぎになる。停電が起こり、交通は乱れ、多くの人が転んで怪我をする。この状態は結構毎年のように起こるのに、改善されている気配はあまりない。だって、必ずと言っていいほど、毎回ほとんど同じニュースが流れるから。

オーストリア、ザルツブルク近くのゴーサウという街を、冬に車で訪れた。アルプスが近いので、ものすごい積雪量だが、訪れた観光客が皆“楽しそう”にゆっくりと車を走らせていた。小さな道の両側は5メートルほどの高さの雪壁。美しい青空の下、まさに雪景色を堪能する人々で溢れていた。この違いはいったい何なのだろう。批判や非難、ではなく、素朴で率直な「疑問」なのだが、こんな極端な場所でなくても、「普通の生活」の中で、毎年のことなのだから、日本でももう少し何とかならないものなのだろうか。ふと思う。もしかしたら理由のひとつはお金、つまり「雪」にあてる予算額のせいがあるのかもしれない。

日本では天候に関するニュースが、ものすごく多いのに気がつく。私たちの関心も大きい。そして、公の“気遣い”の言葉。「気候が不順なので、体調にお気を付けください」や、日常の過ごし方や着るものに関してまで、本当に様々なオススメが語られる。気候や天気、気温に関して、こんなに細やかな情報を出す国はほかにあるだろうか。

私の母は冬になると、「寒いから風邪をひかないようにね」、と演奏旅行中の私と(元)夫に言うのが常だった。彼はよくこんな答えを返したものだ。「オカアサン、エスキモーの人たちはみんな風邪をひいていると思う?!」

最近は温暖化のために、ヨーロッパでもずいぶん雪の量が減ってきた。1976年にベルリンで初めて経験したドイツの冬。マイナス15度の日々がざらで、それでも散歩に出た雪の森の静けさ。ウィーンに移ってから、家族や友人との気温に関する会話では、「マイナス」は省かれていたものだ。毛糸の帽子や毛皮のコート、耳当てや額用のバンド、中に毛皮のついたブーツで“武装”して、散歩に出たり、クリスマスマーケットでホットワインを飲む。それでも、足の裏からじんと寒さが染みってくる。息を吸うと鼻の中がツンとする感覚。東京にいと、そんな冬の日々が無性に懐かしくなるから不思議だ。

私にとって、日本での一番印象的な雪の経験は、コンサートで訪れた北海道の美深。小さな町だが、チョウザメの養殖で有名とか。私たちも見学させていただいた。宿泊した部屋の窓から見た雪の深さと静けさに、列車で旅立つ前の早朝、心が散歩に誘われた。マイナス18度だった。

そして吹雪の中、迎えに来てくれた、町に一台しかないというタクシー。運転するのは、ご主人の代理というオバサン。ゆっくり、ゆっくり一生懸命、ハンドルにしがみつきながら走る。トラックに何台追い抜かされようとも、マイペースでただひたすら美深駅を目指す。そして何かの拍子に、私とその前の晩、コンサートで歌った歌手と知ったオバサンは、なぜか大興奮。突然、ハンドルを握りながら後部席の私を振り返った！ 猛吹雪の中である。

「あの～、サインを…！」

無事に駅まで着くかどうか、一緒にいたマネージャーの人もピアニストの(元)夫も、皆不安で体中がコチコチになりながら、素朴で気持ちの温かいオバサンのタクシーから降り、駅のホームへ。

雪は相変わらず降りしきっている。単線の列車を待つレールは、ただただ真っ白。これで車が走ることができるのか、と目を凝らすと、映画「ぼっぼや」さながらの一車両の車が、黄色い光とともに遠くからゆっくり走り込んできた。幻想的、としか言えない風景だった。2000年1月9日のことである。

P.S. 余談だが、日本の雪問題、国内だけで討論を重ねるだけでなく、ドイツやオーストリア、スイスといった「雪国」に、何か対策の参考意見を求めてみたらどうだろうか。こんなにオンラインが発達してきた現在、ものすごくたやすいことでは、とってしまう。積雪5cm、とかで大騒ぎは不思議すぎる！ 外国での経験のある人たちはどう感じているのかしら？！